

カンボジア 増加する日本の農産物輸入に期待

プノンペンポスト 2023年4月2日

著名な食品加工企業であるリリ(Ly Ly)食品産業のケオ・モム会長によると、日本の農産物輸入の急増とカンボジア産果実への関心の高まりは、カンボジア国内の関係者に対し、その良好な生育条件を活用して多様な作物を生産し、日本市場の一部を獲得する大きな機会を提供する。

米国農務省の報告書は、日本が昨年702億ドルの農産物を輸入し、そのうち21%近くに当たる146億ドルが米国からの輸入であり、2019年に比べて16.4%増加し、さらに「2011年と2012年の記録的な農産物輸入の水準を上回った」としている。

同会長は4月2日日本紙に対し、カンボジア産の果実と野菜は一般的に品質、味、香りが良いため、加工能力の増強は、特に高品質の加工品の需要が活況を呈している日本の大市場への輸出を可能にするだろうと語り、候補としてリュウガンを示唆するとともに、「今後、カンボジアから日本にドライフルーツを輸出する機会が増えると予想している」と述べた。

リュウガンは、学名の *Dimocarpus longan* でも知られているが、アジア原産の熱帯常緑樹で、ライチやランブータンと同じムクロジ科に属し、果肉の白い食用の実をつける。

ベトナムの国営報道機関ベトナムプラスは今年、ベトナム産リュウガンはその値札が13.50ドル/kgという高額であっても、日本市場ではかなり売れ足が速く、ベトナムの生産者に大きな機会を提供していると指摘し、ベトナム果実野菜協会(VinaFruit)のダン・プク・グエン事務局長の発言を引用して、ドラゴンフルーツ、マンゴー、ライチ、リュウガンの4つのベトナム産生鮮果実が、公式チャンネルを通じて日本に輸出できると伝えた。

一方、カンボジア商務省は3月31日、日本アセアンセンター(AJC)と共同で、カンボジア産のドライフルーツやその他の日本市場向け農産物に関するワークショップを対面とオンラインのハイブリッド形式で開催した。同省の発表によると、このイベントには商務省、日本貿易振興機構(JETRO)及び農産物加工部門の業者の代表が参加し、ワークショップの開会式で、商務省のカオ・コサル貿易促進総局長は、同省がカンボジア産のドライフルーツと農産物の日本向け輸出を促進するために取り組んでいると述べた。

同局長は、両国の政府と民間セクターの良好な協力に支えられて、自動車部品、農業関連機器、食品加工、ホテルと観光、病院、小売などの分野で、日本の多数の投資プロジェクトがカンボジアで現在進行中であるとして、「このワークショップは、パンデミック後の経済回復の一環として、知識と経験を共有し、カンボジア産のドライフルーツと農産物の日本への輸出を促進することを目的としている」と述べたと報じられている。

閉会式で、AJCの平林国彦事務総長は、カンボジアの農村景観の豊かさを振り返り、特にマンゴー、カシューナッツ、コショウの「優れた味と独特の香り」に大きな可能性を感じると述べた。商務省の発表によると、同事務総長は、カンボジアは繊維、建設、観光の分野で急速に発展しており、特に農業については持続可能性、繁栄、健康、安全、品質に重点を置いていると述べた。

税関(GDCE)統計の暫定値によると、日本は2022年にカンボジアの6番目に大きな貿易相手国であり、双方向の商品貿易は19億4,800万ドルで、2021年に比べて12.33%増加したが、過去最高であった2019年の20億1,900万ドルからは3.51%減少した。

カンボジアの対日輸出は前年比7.26%増の11億7,300万ドル、対日輸入は21.0%増の7億7,498万9千ドルで、カンボジアの対日貿易黒字は2021年の4億5,311万6千ドルから12.15%縮小して3億9,804万1千ドルとなった。

日本はカンボジアにとって、米国、ベトナム、中国本土に次ぐ第4位の輸出先であり、中国本土、ベトナム、タイ、シンガポール、スイス、台湾、インドネシアに次ぐ第8位の輸入先であった。

執筆者: ヒン・ピセイ